『西方指南抄』『三帖和讃』における親鸞聖人の漢字字体の特徴について——部首に注目して——

藤田夏紀

目次

一、はじめに
二、研究の方法
三、対象資料について
四、調査結果
五、まとめと今後の課題

一、はじめに

本稿の目的は、院政・鎌倉時代に書写された漢字片仮名交り文を比較調査し、漢字の字体に関して、親鸞聖人の用いた字体が特殊であることを明らかにすることにある。

部首に注目した理由は、拙稿[1]において『干禄字書』に記された正字と異体字（俗字・通字）との関係を類型化した結果、部首が別の部首に交替する関係のものが多く認められたこと、また、部首の種類は限られているため、客観的に異同を示しやすいことによる。

親鸞聖人の漢字表記については、山本秀人氏により、『西方指南抄』において、当時、手偏の形で書かれることの多かった木偏の字も木偏で書かれていること、通常写本では用いられない活字正字体と一致する字が多く用いられているこ

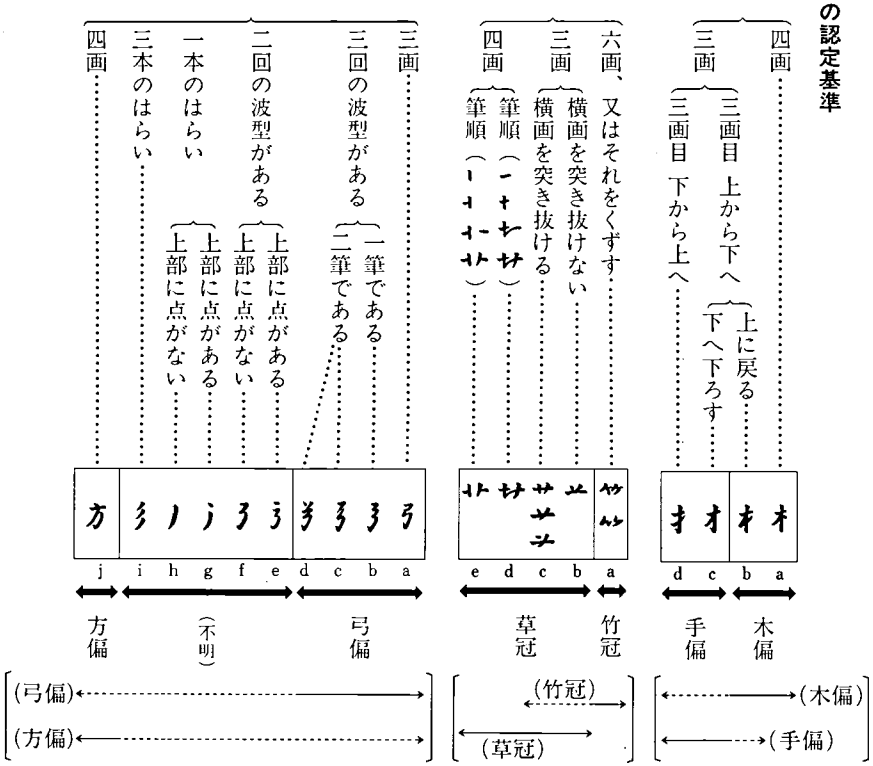
と等、特異な面があることが指摘されている。[2] また、親鸞聖人の漢字の使用については、金子彰氏により、書簡において、漢語は漢字表記、和語は仮名表記という明確な使い分けがあること、使用される漢字の種類は当用漢字とよく一致すること、文脈上、上接の語が漢字か仮名かにより、下接する語がそれに一致する傾向があること等が指摘されている。[3] これらの先行研究をふまえた上で、親鸞聖人の漢字表記についてのさらに詳細な調査研究が必要だと言える。

二、研究の方法

調査対象とする漢字は、木偏と手偏、竹冠と草冠、弓偏と方偏という三組のペア、合計六種類の部首に属するものとする。これらを選んだ理由は、書写本において、木偏の字が手偏に、竹冠の字が草冠に、弓偏の字が方偏に書かれることはよく見られる現象であり、『干禄字書』、観智院本『類聚名義抄』等の古辞書[4]にも正字・異体字関係にある漢字の部首として記載があるからである。例えば『干禄字書』には、正字が木偏、異体字が手偏の漢字が三組（枉、横、様）記され、正字が竹冠、異体字が草冠の漢字が六組（第、等、節、篤、纂、籌）記されている。また、観智院本『類聚名義抄』には、正字が木偏、異体字が手偏の漢字が二十四組（札、杞、杇、栓、枉、桓、棒、榭、棧、櫛、構、検、楮、櫓、椳、楓、櫃、楢、樹、樫、梯、横、極、様）、正字が竹冠、異体字が草冠の漢字が十三組（箔、等、笞、篤、筋、節、篇、篋、筐、篡、簸、簒、築）、正字が弓偏、異体字が方偏の漢字が五組（引、弢、弛、弧、彈）記されている。さらに『同文通考』には、本字が木偏、譌字が手偏の漢字が一組（様）、本字が竹冠、譌字が草冠の漢字が一組（筵）、本字が弓偏、譌字が方偏の漢字が四組（引、弘、強、彌）記されている。これらの古辞書に記載された漢字が、実際の書写本においてどのように書かれているのか、という視点からの調査も必要であろうと思われる。本稿では、先の六種類の部首に属する、対象資料内の全ての漢字[5]について、部首の形がどう書かれているかを調査する。

部首の形については、類似した形をもつ部首のペアごとに、共通する基準を定め、何の部首か認定することとした。

〔図1〕 部首の形の認定基準



（注）□の中に示した形が書写本の中に見られる部首の形の代表形であり、a b c…の記号を付している。↔は、現代の規範において、その部首と判断できる範囲を示す。下の〔〕内の↔は、今回の調査において、それぞれの部首の形に見られたバリエーションの範囲を示す。⇔部分は、その漢字の本来の部首とは異なる種類の部首の形をとる範囲を示している。

その基準を前頁の図に示した。これらは、書写された個々の部首の形から帰納して得られたものである。

以上の認定基準にもとづいて設定したａｂｃ…という部首の形の代表形によって、対象資料の部首の形を分類していくこととする。

三、対象資料について

親鸞聖人の書写資料として、真筆である『西方指南抄』と親鸞聖人の弟子の書写である『三帖和讃』を取り上げる。対照資料として、前後の院政・鎌倉時代の書写本で、同じ漢字片仮名交り文で書かれた仏教関係の書物である『打聞集』、『法華百座聞書抄』、東寺観智院本『三宝絵詞』、光長寺本『宝物集』の四文献を取り上げる。以下に書写年次順に書誌的事項について述べる。(6)

1、『打聞集』

宣命書を含む漢字片仮名交り文による仏教説話集である。紙背文書に見える年号のうち最も新しい天永二年（一一一一）以降、表紙にある長承三年（一一三四）までの間が書写時期であり、この時期をさかのぼるそう遠くない時期に成立したと考えられている。表紙に署名のある天台宗の僧栄源の書写かと言われる。行間の取り方にばらつきがあり、各行は一直線にそろっていない所もある。書体には、かなりくずされた行書も交じる。

（表紙）「或云釈尊入滅之後至長承三年甲寅二千八十三年也　従建立中堂戊辰歳至于長承三年甲寅歳三百卌七年　桑門栄源之」

2、『法華百座聞書抄』

天仁三年（一一一〇）から行われた、般若心経、法華経等の説経の聞書を更に抄出したものと言われている。天仁三年以降、大安寺の僧都永の書写かと言われる。行間がつまっており、各行はまっすぐにそろっていないところもある。書体には行書も交じっている。

（冒頭）「天仁三年二月廿八日令始修法一百座　大安寺僧都永」

3、『三帖和讃』

「浄土和讃」、「浄土高僧和讃」、「正像末法和讃」の総称である。先の二つは、一部は浄土真宗の開祖親鸞の真筆であるが、大部分は親鸞の高弟真仏の筆と言われている。初稿本の成った宝治二年（一二四八）正月から、建長七年（一二五五）四月の奥書をもつ再稿本の書かれた間に書写されたと考えられる。「正像末法和讃」は先の二つとは成立も別で筆跡も異なると言われる。旧表紙裏に「釈覚然」とあることから、覚然筆とも考えられている。奥書によれば成立した正嘉元年（一二五七）以降の書写である。行数はそろっており、一字一字丁寧に書かれている。

（奥書）「正嘉元年丁巳壬三月一日　愚禿親鸞八十五歳書之」

4、『西方指南抄』

法然上人の行状記、法語、消息等を集録したものである。奥書によれば康元元年（一二五六）、親鸞八十五歳の頃の書写である。行数はそろっているが、『三帖和讃』と比べると、ややくずされた字で書かれている。

（奥書）「康元元丁巳正月二日書之　愚禿親鸞八十五歳」（上本）
「康元元年丙辰十月十三日　愚禿親鸞八十四歳書之」（上末）
「康元元年丙辰十月十四日　愚禿親鸞八十四歳書写之」（中末）

「康元元丙辰十月卅日書之　愚禿親鸞八十四歳」（下本）
「康元元丙辰十一月八日　愚禿親鸞八十四歳書之」（下末）

5、東寺観智院本『三宝絵詞』

永観二年（九八四）、源為憲が冷泉天皇第二皇女尊子内親王に出家を勧める書として奉った仏教説話集である。奥書によれば、文永十年（一二七三）、三善朝臣の書写である。上巻と、中・下巻との間には表記の上で著しい差異が認められ、上巻は、自立語は漢字で記し、片仮名宣命体となっている。行数はそろっており、丁寧に書かれている。書体は行書も交じっている。（本稿では上巻までを調査している。）

（奥書）「文永十年八月八日彼岸中日未刻書写了戸部二千石三善朝臣（花押）」

6、光長寺本『宝物集』

奥書によれば、弘安十年（一二八七）、日蓮宗の僧日春の書写したものである。仏教説話集である。行間の取り方には、ばらつきがあり、各行はまっすぐに整っていないところもある。書体には行書が交じる。巻一のみの零本である。

（奥書）「弘安十年歳次丁亥二月一日書了釈日春」

以上の六文献は、一一一〇年頃から一二八七年に亘る院政・鎌倉時代に書写された、仏教関係の説話集、和讃、法然上人の行状記等であり、漢字片仮名交り文で書かれている。この中で、3の『三帖和讃』は親鸞筆ではないが、親鸞筆の『西方指南抄』に準ずるものとして、漢字字体の特徴を見ていくこととする。尚、1㊐、2�法、3㊏、4㊐、5㊥、6㊔と資料名を略すこととする。

四、調査結果

次に、(1)木偏と手偏、(2)竹冠と草冠、(3)弓偏と方偏のそれぞれについて、資料ごとに調査結果を記す。

(1)木偏と手偏

①木偏

〔表1〕打聞集

部首形 / 活字正字体	a 木	c 才	d 扌
村	3		
杖	1		
松	1		
枉	1		
林	1		
枝	2		
杷	1		
枇	1		
桂	1		
栴	2		
桃	2		
樹	4		
橋	2		
檀	1		
樓	3	1●	
札		3●	
極		7●	
構		3●	
權		1●	
樣		30●	19●
合計(字)	26	45●	19●

〔表2〕法華百座聞書抄

部首形 / 活字正字体	a 木	b 木	c 才	d 扌
杖	1			
林	2			
枝	1			
桃	1			
桶	1			
根	8	9		
楊	2	2	2●	
樹	1	1	1●	
柱		1		
樓		1		
機		1		
檀		1		
松			1●	
析			1●	
栴			1●	
樣			4●	
極				2●
合計(字)	17	16	10●	2●

〔表3〕三帖和讃

部首形 / 活字正字体	a 木
枝	1
林	4
梅	1
極	6
楞	1
樓	2
機	7
樹	13
權	2
合計(字)	37

〔表4〕西方指南抄

部首形 / 活字正字体	a 木	c 才
林	10	
松	1	
根	48	
梅	2	
桃	1	
楞	1	
機	47	
橋	2	
横	3	
檀	4	
權	10	
櫻	3	
極	82	1●
樹	8	1●
模		1●
樣		2●
概		1●
合計(字)	222	6●

〔表5〕三宝絵詞

部首形 / 活字正字体	a 木	b 木	c 才	d 才
松	1			
枯	2			
根	4			
株	1			
桂	1			
橋	1			
林	11	2	1●	
杖	1		2●	
枝	2		1●	
樓	1		1●	
樹	1		7●	
檀	5		3●	
村	2	2		1●
朽			1●	
柄			1●	
栖			1●	
極			2●	
構			4●	
權			2●	
合計(字)	33	4	26●	1●

〔表6〕宝物集

部首形 / 活字正字体	a 木	c 才	d 扌
松	2		
根	1		
橘	1		
樓	1	1●	
檀	1	3●	3●
栴	1		7●
橋		1●	
楊		1●	1●
杖			1●
杞			1●
棟			1●
椀			1●
極			4●
楞			1●
模			1●
槌			3●
樣			3●
樹			1●
檢			1●
權			1●
合計(字)	7	6●	30●

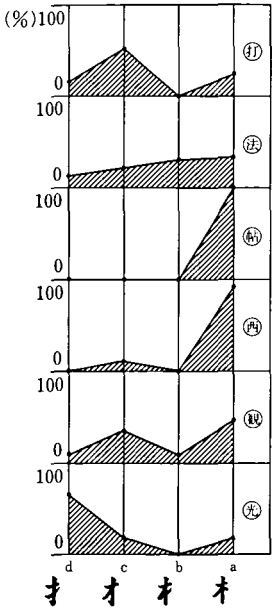
(注) ●印は手偏で書かれている用例を示す。

〔表7〕資料別に見た用例字数（木偏）

資料名 / 部首形	a 木	b 木	c 才	d 扌	合計(字)
打	26		45●	19●	90
	29		50	21	
法	17	16	10●	2●	45
	38	36	22	4	
帖	37				37
	100				
西	222		6●		228
	97		3		
観	33	4	26●	1●	64
	52	6	41	2	
光	7		6●	30●	43
	16		14	70	

(注) 上段が用例字数、下段は各資料内での割合(%)を示す。
●印は手偏で書かれている用例を示す。

〔グラフ1〕資料別に見た部首の形の割合（木偏）



(注) 上欄の〔表7〕の用例字数の割合（%）をもとにしている。

『打聞集』では、全字数90字のうち71％を占める64字が手偏で書かれている。同様に、『法華百座聞書抄』では26％、『三宝絵詞』では43％、『宝物集』では84％の字が手偏（〔オ〕か〔扌〕）で書かれている。これに対し、『三帖和讃』は、手偏で書かれるものは一例もなく、全用例が木偏（〔木〕）で統一され、『西方指南抄』は97％が木偏で書かれている。他資料では手偏で書かれることが普通である「極、權」も、木偏で書かれている。（ただし『西方指南抄』に一例例外がある。）また、二資料を比較すると、『西方指南抄』は手偏で統一して書かれる字もあり、『三帖和讃』とは異なる様相を示している。これは書写者の違いによるものかと考えられる。

〔表8〕手偏で書かれることのある木偏の字

資料名 ＼ 漢字	打	法	帖	西	觀	光
權	○オ		木	木	○オ	○扌
極	○オ	◎扌	木	◎オ	○オ	○扌
樓	◎オ	木	木		◎オ	○オ
樹	木	◎オ	木	◎オ	◎オ	○扌
樣	◎扌	○オ		○オ		○扌
構	○オ				○オ	
模				○オ		○扌
梅	木	◎オ	木			◎扌
杖	木	木			◎オ	○扌
楊		◎オ				◎扌

（注）○印で囲んだものは、全用例が手偏で書かれていることを示す。
◎印で囲んだものは、手偏で書かれる用例と木偏で書かれる用例と両方存することを示す。
一資料のみに用例が存する字を除く。

檀
木
木
木
才
扌

手偏で書かれる字の種類を見ると、「權、極、様、構、模」は全用例が手偏で統一して書かれる資料が多い。その中で、『三帖和讃』、『西方指南抄』はこれに反し、木偏で統一されたり、木偏で書かれる用例が存したりする。「様」は『干禄字書』、『類聚名義抄』、『同文通考』に、「極」は『類聚名義抄』に手偏が異体であるという記載がある。

②手偏

〔表9〕打聞集

b 木	c 才	d 扌	部首形 / 活字正字体
	10●	2	打
	1●		招
	1●		拔
	5●		投
	13●		持
	1●		授
	1●		推
	5●		捨
	2●		掘
	1●		捧
	1●		撰
1●	10●		指
1●	51●	2	合計(字)

〔表10〕法華百座聞書抄

b 木	c 才	d 扌	部首形 / 活字正字体
		1	抑
	9●		持
	1●		抑
	6●		授
	3●		提
	3●		攝
1			打
1	22	1	合計(字)

〔表11〕三帖和讃

c 才	d 扌	部首形 / 活字正字体
	1	指
	1	授
1●		抄
1●		持
1●		捨
1●		接
18●		提
3●		擇
14●		攝
39●	2	合計(字)

〔表12〕西方指南抄

c 才	d 扌	部首形 / 活字正字体
1●	5	抄
5●	1	按
14●	1	接
6●	1	捻
1●		打
3●		抑
3●		拔
2●		披
1●		拂
11●		指
53●		持
2●		挍
1●		振
14●		捨
1●		掠
2●		採
4●		推
4●		揚
2●		授
31●		提
2●		損
6●		攄
4●		摽
8●		擇
46●		攝
227●	8	合計(字)

〔表13〕三宝絵詞

b 扌	c 才	d 扌	部首形 / 活字正字体
	20●	3	捨
	5●	1	授
	1●		挾
	3●		投
	5●		折
	1●		押
	1●		抽
	1●		拂
	2●		拔
	2●		拘
	1●		拭
	3●		拾
	13●		持
	1●		指
	5●		振
	4●		捕
	1●		捧
	1●		掃
	1●		推
	4●		提
	1●		損
	1●		搜
	1●		摧
	2●		撰
	1●		撲
1	4●		打
1	85●	4	合計(字)

〔表14〕宝物集

c 才	d 扌	部首形 / 活字正字体
	1	抄
	1	抑
	4	拾
	2	指
	3	振
	3	提
	1	撻
1●	2	持
1●	2	捨
1●		拔
3●	19	合計(字)

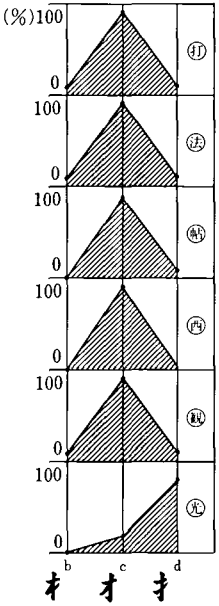
(注) ●印は(才(c形))で書かれている用例を示す。

〔表15〕資料別に見た用例字数（手偏）

資料名＼部首形	d 扌	c オ	b 木	合計(字)
打	2	51●	1	54
	4	94	2	
法	1	22●	1	24
	4	92	4	
帖	2	39●		41
	5	95		
西	8	227●		235
	3	97		
観	4	85●	1	90
	4	94	2	
光	19	3●		22
	86	14		

（注）上段が用例字数、下段は、各資料内での割合（%）を示す。●印は〔オ（c形）〕で書かれている用例を示す。

〔グラフ2〕資料別に見た部首の形の割合（手偏）



（注）上欄の〔表15〕の用例字数の割合（%）をもとにしている。

『打聞集』では、全字数54字のうち94%を占める51字が〔オ〕で書かれ、現代の手偏の形〔扌〕と異なったものが多数を占める。同様に、『法華百座聞書抄』の92%、『三帖和讃』の95%、『西方指南抄』の97%、『三宝絵詞』の94%が〔オ〕で書かれている。[7] これに対し、『宝物集』では、現代の手偏の形と同じ〔扌〕が86%を占め、他の資料とは異なる様相を示す。この時期（鎌倉時代後期）ころから〔オ〕→〔扌〕という手偏の形の変化が見られたと考えられる。[8] 手偏については、『三帖和讃』、『西方指南抄』に関わる特徴的な事象は見られない。

ここで、木偏と手偏の書かれ方について、〔表7〕と〔表15〕とを比較する。調査した資料の中では、本来木偏であるべき字が手偏で書かれることはあるが、その逆は見られなかった。『三帖和讃』、『西方指南抄』においては、木偏は〔木〕、手偏は〔オ〕と区別が明確であった。ただし、『西方指南抄』には少数の例外が見られた。『宝物集』の手偏の書かれ方は他資料と異なる傾向を示しているが、これは木偏の書かれ方とも関連し、木偏の字が手偏の形で書かれる場合も〔扌〕が多用されている。

(2)竹冠と草冠

①竹冠

〔表16〕打聞集

部首形 / 活字正字体	a ⺮	c ⺾	b 灬	(ホ)
竺	23			
筆	1			
管	1			
箱	4			
籠	2			
等		3●	17●	11
答			17●	
合計(字)	31	3●	34●	11

〔表17〕法華百座聞書抄

部首形 / 活字正字体	a ⺮	1	1	1	1	6
竺	1					
筆	1					
第			1●	1		
答			3●			
等					6	
合計(字)	2	4●	1	6		

部首形 / 活字正字体	a ⺮	(ホ)	(わ)	b 灬	(ホ)

〔表18〕三帖和讃

部首形 / 活字正字体	a ⺮
竺	1
第	6
等	19
筏	1
算	1
合計(字)	28

〔表19〕西方指南抄

部首形 / 活字正字体	a ⺮	c ⺾	e 卜
竺	3		
笠	3		
第	52		
箇	7		
筆	1		
等	114		
筏	1		
算	4		
範	1		
節	4		
簡	8		
籠	1		
答		23●	4●
合計(字)	199	23●	4●

〔表20〕三宝絵詞

活字正字体＼部首形	a 竹	c 艹	d 扌	(ホ)	(才)
竺	1				
箭	6				
篠	1				
筋		2●			
答		2●	27●		
等		4●		10	
第					2
合計(字)	8	8●	27●	10	2

〔表21〕宝物集

活字正字体＼部首形	a 竹	c 灬	(才)	(ホ)
笠	6			
箕	1			
範	1			
節	1	2●		
第			1	
等				5
合計(字)	9	2●	1	5

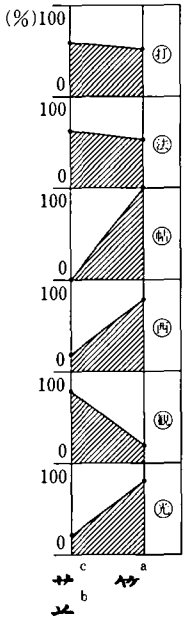
(注) ●印は草冠で書かれている用例を示す。

〔表22〕資料別に見た用例字数（竹冠）

資料名＼部首形	a 竹	c 艹 b 灬 e 扌	合計(字)
打	31	37●	68
	46	54	
法	2	4●	6
	33	67	
帖	28		28
	100		
西	199	27●	226
	88	12	
観	8	35●	43
	19	81	
光	9	2●	11
	82	18	

(注) 上段が用例字数、下段は各資料内での割合（%）を示す。●印は草冠で書かれている用例を示す。

〔グラフ3〕資料別に見た部首の形の割合（竹冠）



(注) 右欄の〔表22〕の用例字数の割合をもとにしている。

『打聞集』では、全字数68字のうち54％にあたる37字が草冠で書かれている。同様に、『法華百座聞書抄』では67％、『三宝絵詞』では81％が草冠（〔艹〕や〔丷〕）で書かれている。これに対し、『三帖和讃』は草冠で書かれるものは一例もなく、全用例が竹冠〔竹〕で統一され、『西方指南抄』は88％が竹冠で書かれている。また、この二資料を除く他の資料では、「第」は〔才〕、「等」は〔ホ〕と略字が使用されることがあり、『宝物集』で草冠で書かれる字の割合が小さくなっているのは、略字の使用が多いためだと考えられる。『三帖和讃』、『西方指南抄』では、「第、等」が略字で書かれることは一例もない。この二資料を比較すると、『西方指南抄』には、「答」の字に限り草冠で書かれるという例外が存する。ただし『三帖和讃』には「答」の字が存しないため、「答」の字に関する比較はできない。

草冠で書かれる字の種類をみると、「等、第、答、筋」は全用例が草冠で書かれている資料が多い。その中で、『三帖和讃』、『西方指南抄』はこれに反し、竹冠で統一して書かれている。（『西方指南抄』の「答」の字を除く。）「等」「節」は『干禄字書』、『類聚名義抄』に、「第」は『干禄字書』に、「筋」は『類聚名義抄』に草冠が異体であるという記載がある。

〔表23〕草冠で書かれることのある竹冠の字

資料名＼漢字	等	第	節	答	筋
打	⊗			⊗	
法		⊗		⊗	
帖	⁂	⁂			
西	⁂	⁂	⁂	⊗	
観	⊗			⊗	⊗
光			⊗		

（注）○印で囲んだものは、全用例が草冠で書かれていることを示す。
◌印で囲んだものは、竹冠で書かれる用例と草冠で書かれる用例と両方存することを示す。

②草冠

〔表24〕打聞集

部首形 / 活字正字体	c 艹	b 丷
芄*1	9	
芄*2	1	
草	7	
菩	1	
落	9	
葬	1	
蓑	1	
蓮	2	
薗	2	
薩	1	
藏	21	
蘭	1	
若	2	11●
藥	6	5●
花		8●
茲		1●
著		6●
蓋		1●
合計(字)	64	32●

＊1「菩薩」の抄物書　＊2「菩提」の抄物書

〔表25〕法華百座聞書抄

部首形 / 活字正字体	c 艹	b 丷
芒	1	
芄	36	
芙	1	
芄	10	
苦	2	
莚	1	
菀	1	
菩	1	
華	1	
葉	3	
蓉	1	
蓮	19	
薀	1	
薩	2	
薗	1	
藏	11	
藐	4	
藥	12	
草	9	1●
花		83●
若		24●
合計(字)	117	108●

〔表26〕三帖和讃

部首形 / 活字正字体	d 艹	e 丷	c 艹
若	3		
苦	5		
華	3		
葉	1		
菩	29	1	10
莊	1	1	4
薩	19	1	8
萬	6		3
藏		1	3
合計(字)	67	4	28

〔表27〕西方指南抄

部首形 / 活字正字体	c 艹	e 𠂉	b 丷
草		1	
慕		1	
苦	3	5	
菩	53	45	
蒙	4	1	
薫	8	1	
藏	36	4	
花	2		
荷	1		
菓	1		
華	48		
莊	8		
萬	1		
葬	5		
葛	1		
蓮	11		
墓	2		
薄	2		
薗	2		
藥	4		
藤	1		
蘇	1		
若	14	2	13●
薩	66	1	6●
著			1●
合計(字)	274	61	20●

〔表28〕三宝絵詞

部首形 / 活字正字体	c 艹	b 丷
芹	16	
芥	2	
芳	1	
芹	6	
苑	1	
苦	22	
草	9	
荒	3	
荷	1	
莖	1	
莚	3	
莫	2	
菓	10	
菜	8	
菴	6	
落	16	
葬	1	
蓮	7	
蕀	1	
薗	1	
藥	3	
花	10	11●
若	1	42●
葉	1	3●
著		8●
蓋		1●
薦		1●
藏		1●
蘇		1●
合計(字)	132	68●

〔表29〕宝物集

活字正字体 ＼ 部首形	c 艹	c 灬	b 亠
落	1		
蒿	1		
薗	1		
藁	1		
薩	1		
藍	1		
舊	2		
苦	3	2	
草	1	5	
菊	2	1	
蒙	1	1	
藤	11	1	
藥	2	2	
藏	1	1	
蘭	1	1	
芃		6	
芹		1	
范		1	
莊		1	
萊		1	
葉		6	
華		1	
花	6		12●
若			2●
茂			2●
合計(字)	36	31	16●

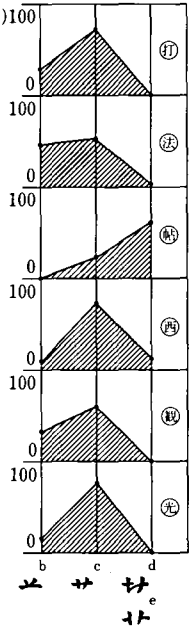
(注)　●印は(亠(b形))で書かれている用例を示す。

〔表30〕資料別に見た用例字数（草冠）

資料名 ＼ 部首形	d 艹	c 艹	b 亠	合計(字)
打		64	32●	96
		67	33	
法		117	108●	225
		52	48	
帖	71	28		99
	72	28		
西	61	273	20●	354
	17	77	6	
観		132	68●	200
		66	34	
光		67	16●	83
		81	19	

(注)　上段が用例字数、下段は各資料内での割合(%)を示す。●印は(亠(b形))で書かれている用例を示す。

〔グラフ4〕資料別に見た部首の形の割合（草冠）



(注)　上欄の〔表30〕の用例字数の割合（%）をもとにしている。

『三帖和讃』、『西方指南抄』に特徴的なのは、他資料には見られない四画で書かれた（艹、艹）が存することである。特に、『三帖和讃』では全字数99字のうち72%を占める71字が（艹、艹）で書かれている。また、『三帖和讃』には、他資料には見られる（亠）で書かれた字が存しない。さらに、『打聞集』、『法華百座聞書抄』、『三宝絵詞』、『宝物集』には、

「菩薩」、「菩提」の抄物書である「井」、「井」が存するが、『三帖和讃』、『西方指南抄』では、抄物書で書かれていない。『三帖和讃』と『西方指南抄』とを比較すると、『三帖和讃』のみに四画の草冠の中の〔艹〕が見られる。例外である四例の〔艹〕は全て「浄土和讃」の中の用例であり、所在に偏りが見られる。一方、『西方指南抄』には〔艹〕で書かれた例は存しない。また、〔丷〕で書かれた例も存する。

〔丷〕で書かれる字の種類を見ると「若、花、著、蓋」は、全用例が〔丷〕で書かれている資料が多い。この中で、『三帖和讃』はこれに反し「若」も〔艹〕で書かれている。「若」の字については、よく似た形の「苦」は〔艹〕で書かれていることから、草冠の形により「若」と「苦」との字の区別を明確にする効果があると考えられる。

〔表31〕〔丷(b形)〕で書かれることのある草冠の字

資料名 / 漢字	打	法	帖	西	観	光
若	丷	㊀	艹	丷	丷	㊀
花	㊀	㊀			丷	
著	㊀			㊀	㊀	
蓋	㊀				丷	㊀

（注）○印で囲んだものは、全用例が〔丷(b形)〕で書かれていることを示す。
一資料のみに用例が存する字を除く。

ここで、竹冠と草冠の書かれ方について、〔表22〕と〔表30〕とを比較する。調査した資料の中では、本来竹冠であるべき字が草冠で書かれることはあるが、その逆は見られなかった。『三帖和讃』では、竹冠は〔竹〕、草冠は〔艹、丷、艹〕と区別が明確であった。

(3)弓偏と方偏

①弓偏

〔表32〕打聞集

j	h	f	g	e	形部首 / 活字正字体
				7	弘
				2	張
				2	强
	1	1	2	3	引
3●				1	彌
3●	1	1	2	15	合計(字)

〔表33〕法華百座聞書抄

j	g	e	形部首 / 活字正字体
		1	引
34●	2	12	彌
34●	2	13	合計(字)

〔表34〕三帖和讃

i	b	a	形部首 / 活字正字体
		1	引
		10	弘
		1	强
2	2	62	彌
2	2	74	合計(字)

〔表35〕西方指南抄

f	d	c	b	a	形部首 / 活字正字体
				1	彈
			4	9	引
			5	5	弘
			1	4	强
13	2	12	188	26	彌
13	2	12	198	45	合計(字)

〔表36〕三宝絵詞

活字正字体 ＼ 部首形	f 弓	g 亻
強	6	
弘	5	4
彌	11	4
合計(字)	22	8

〔表37〕宝物集

活字正字体 ＼ 部首形	a 弓	f 弓	j 方
張	1		
弼	1		
彈		1	
弘		1	2●
引			1●
彌			1●
合計(字)	2	2	4●

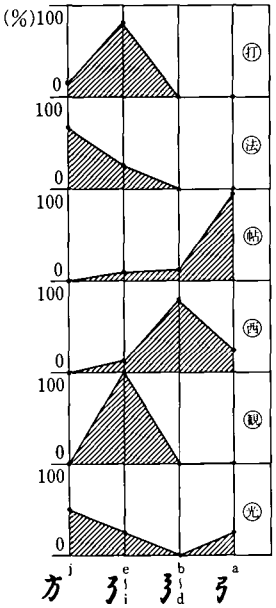
(注) ●印は方偏で書かれている用例を示す。

〔表38〕資料別に見た用例字数（弓偏）

資料名 ＼ 部首形	a 弓	b 弓 d	e 弓 i	j 方	合計(字)
打			19	3●	22
			86	14	
法			15	34●	49
			31	69	
帖	74	2	2		78
	94	3	3		
西	45	212	13		270
	17	78	5		
観			30		30
			100		
光	2		2	4●	8
	25		25	50	

(注) 上段が用例字数、下段は各資料内での割合(%)を示す。●印は方偏で書かれている用例を示す。

〔グラフ5〕資料別に見た部首の形の割合（弓偏）



(注) 上欄の〔表38〕の用例字数の割合（%）をもとにしている。

『三帖和讃』、『西方指南抄』において特徴的なのは、〔弓、弓〕のように明らかに弓偏と分かる形で書かれた用例が多いことである。特に『三帖和讃』では78字中94%を占める74字が〔弓〕で書かれている。また、『打聞集』、『法華百座聞

②方偏

〔表39〕打聞集

部首形 ＼ 活字正字体	e 弓
施	1

〔表40〕法華百座聞書抄

部首形 ＼ 活字正字体	e 弓	j 方
施	1	4

〔表41〕三帖和讃

部首形 ＼ 活字正字体	a 弓	j 方
於		3
放*	1●	

*支部

〔表42〕西方指南抄

部首形 ＼ 活字正字体	a 弓	b 弓	j 方
於			18
施	3●	4	
放*			1

〔表43〕三宝絵詞

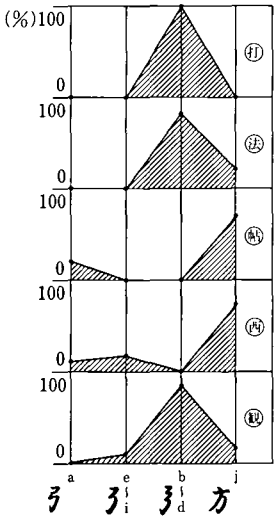
部首形 ＼ 活字正字体	b 弓	h 丿	g 亠	f 弓	j 方
施		1	3	19	1
旃	1				

〔表44〕資料別に見た用例字数（方偏）

資料名 ＼ 部首形	a 弓	b 弓	e~h 弓	j 方	合計(字)
打			1 (100)		1
法			4 (80)	1 (20)	5
帖	1● (25)			3 (75)	4
西	3● (12)	4 (15)		19 (73)	26
観		1 (4)	23 (92)	1 (4)	25

（注）上段が用例字数、下段は各資料内での割合(%)を示す。
●印は弓偏で書かれている用例を示す。

〔グラフ6〕資料別に見た部首の形の割合（方偏）



（注）上欄の〔表44〕の用例字数の割合をもとにしている。

書抄』、『宝物集』には、方偏で書かれる用例が存するが、『三帖和讃』、『西方指南抄』には一例も存しない。さらに、『三帖和讃』には、他資料には見られない〔彡〕が存するが、この用例は、「浄土和讃」のみに偏って使用されている。『西方指南抄』にも、〔彡、彡〕という独特のくずし方の弓偏が見られた。全資料内で、弓偏が方偏の形で書かれることのある字は、「引、弘、强、彌」であった。「引」は『類聚名義抄』、『同文通考』に、「弘、强、彌」は『同文通考』に方偏が異体であるという記載がある。

『三帖和讃』、『西方指南抄』に見られる特徴としては、他資料には見られない弓偏で書かれた用例が存することである。方偏が弓偏の形で書かれることのある字は「施、放」であった。（ただし「放」は支部である。）

ここで、弓偏と方偏の書かれ方について、〔表38〕と〔表44〕とを比較する。本来弓偏であるべき字が方偏で書かれることも、その逆の、本来方偏であるべき字が弓偏で書かれることもあった。ただし、『三帖和讃』、『西方指南抄』においては、方偏が弓偏で書かれることはあるが、その逆はなく、『打聞集』、『法華百座聞書抄』においては、弓偏が方偏で書かれることはあるが、その逆はない。

五、まとめと今後の課題

以上の調査結果より、『三帖和讃』、『西方指南抄』において見られる、親鸞聖人の漢字字体の特徴を述べる。

木偏の字については、同時代の他資料では特定の字（「極、權」等）が手偏の形で書かれている中で、木偏で統一的に書かれるという特徴が認められた。ただし、親鸞筆『西方指南抄』では少数の例外があった。

手偏の字については、特徴は認められなかった。ただし、手偏の書かれ方は、院政期の写本と同じ〔才〕であり、鎌倉時代後期頃から見られる〔扌〕ではないことを記しておく。

竹冠の字については、同時代の他資料では特定の字（「等、第」等）が草冠の形で書かれている中で、竹冠で統一的に書

かれるという特徴が認められた。但し、親鸞筆『西方指南抄』では「答」の字に限り、草冠で書かれているという例外があった。

草冠の字については、他資料にはない四画の〔艹、艹〕で書かれる字が存するという特徴が認められた。この特徴は、親鸞の弟子筆『三帖和讃』でより顕著に認められた。また『三帖和讃』では〔丷〕が一例も使用されず、『西方指南抄』でも少数例しか存しなかった。

弓偏の字については、同時代の他資料では方偏で書かれる字が存する中で、弓偏で統一的に書かれるという特徴が認められた。特に『三帖和讃』では明確に弓偏と分かる〔弓〕が多数を占めていた。

方偏の字については、他資料には見られない、方偏が弓偏で書かれる字が存するという特徴が認められた。

以上のように、親鸞聖人とその弟子の書写資料は、同時代に書写された他資料に比べて特殊な様相を示している。これは、『干禄字書』、観智院本『類聚名義抄』といった当時日本に存在していた古辞書に記載されている正字の規範とよく一致しているように見える。(9) この特徴は『三帖和讃』において、より顕著に認められた。漢字の使用や仮名遣い等、表記に関する一定の規範意識(10)をもっていた親鸞は、漢字の字体についても何らかの依るべき規範に従おうとしたのではないかと考えられる。

今後の課題としては、親鸞聖人書写『西方指南抄』と、その弟子の書写『三帖和讃』とではやや異なる様相を示していたため、他の親鸞真筆の資料を調査し、『三帖和讃』の方が丁寧に書かれているという点とも関連づけて、親鸞の漢字字体の特徴を明らかにしていきたい。また、親鸞の依拠した規範は何なのか考えていく必要がある。さらに、部首の書かれ方という観点からだけでなく、他の漢字についても調査し、親鸞聖人の漢字字体の特異性の全体像を見出していきたい。

〈注〉

(1) 拙稿「『干禄字書』における正字・異体字関係の類型について」（国文学攷136　平3・12）

(2) 山本秀人「漢字字体の一問題――院政・鎌倉時代書写の片仮名文における木偏と手偏について――」（福岡教育大学紀要41　平4・2）

(3) 金子彰「親鸞聖人遺文の表記研究(1)――自筆書簡に於ける語の漢字表記を主として――」（新潟大学教育学部長岡分校研究紀要25　昭55・3）

(4) 『干禄字書』は中国、唐代に成立、書写されたものを石刻したものがもとになっている字体字書で、平安時代中期には日本に伝わっていたことが知られている。観智院本『類聚名義抄』は『干禄字書』の影響も受けて、日本で、鎌倉時代に成立、書写された漢和辞書である。『同文通考』は江戸時代に成立、出版された字体研究書である。

ここでいう「正字」とは、辞書に定められた、標準となる、正式な、書くべき字の形であり、「異体字」とは、正字とは字の形が異なるが、正字と同じ音義を有するものである。異体字の方が、正字より一般に使用される場合も多い。

(5) ただし、例えば部首が木部の中で木偏以外の漢字（梨）や、弓部の中で弓偏以外の漢字（弟）等は除くこととする。

(6) 対象資料については、以下の影印本を使用した。また書誌的事項についても、これらの解説を参考とした。

東辻保和著『打聞集の研究と総索引』（清文堂　昭56）

山岸徳平解題『法華修法一百座聞書抄』（勉誠社　昭51）

宮崎圓遵、平松令三解説『親鸞聖人真蹟集成』三巻（法蔵館　昭49）

平松令三解説『親鸞聖人真蹟集成』五、六巻（法蔵館　昭50）

小泉弘解説『三宝絵詞上』（勉誠社　昭60）

小泉弘著『貴重古典籍叢刊8古鈔本寶物集』（角川書店　昭48）

(7) 注（2）の論文により、院政・鎌倉時代の写本には〔オ〕が普通に見られるものだという指摘がある。

(8) 平安時代、鎌倉時代、室町時代の書写本の調査により、鎌倉時代を過渡期として、〔オ〕から〔扌〕への変化があったと考えている。

(9) 『干禄字書』、観智院本『類聚名義抄』の記載を以下に示す。（字体注記以外は省略する。）

○木偏が正字、手偏が異体字

極（ママ）　極谷欠　（名）仏下本115・1　木部）

（極　今極字　（名）仏下本57・2　手部）

様　㨰　上通上正　（十）84・4）

様（正）　（㊟仏下本96・1　木部）
様（谷様字）　（㊟仏下本60・2　手部）

○竹冠が正字、草冠が異体字

茅第（上俗下正）　（㊥75・3）
寺等（上通下正）　（㊥68・4）
茆節（上俗下正）　（㊥92・2）
第（第谷）　（㊟僧上75・8　竹部）
　（㊟僧上37・5　草部）
　（㊟僧上79・2　竹部）
等（正寺通）　（㊟僧上58・5　草部）
寺（谷等字）　（㊟僧上77・6　竹部）
節（谷節）　（㊟僧上48・2　草部）
茆（谷節字）

○〔艹〕が正字、〔ㅗ〕が異体字

若若（上通下正）　（㊥98・2）

○弓偏が正字、方偏が異体字

引（正）　（㊟僧中24・5　弓部）
方（引字谷欠）　（㊟僧中31・2　方部）

また、「答」の字については、

答（ハコ）　（㊟僧上63・3　竹部）
　（㊟僧上47・2　草部）
　（㊟仏下末29・6　八部）
荅（コタフ）（今荅字）

のように、竹冠の字に「コタフ」の訓みがない。

また、『類聚名義抄』の草冠の見出し字は、全て〔艹〕ではなく、〔艹〕で書かれている。（ただし、つながって見えるものもある。）

(10) 注(3)の論文を参考とした。

また、

藤谷一海「親鸞聖人の仮名遣に就て――板東本教行信証の仮名遣を主として――」(大谷学報17・3 昭11・10)、

常磐井猷磨「親鸞聖人の特殊仮名遣について」(真言研究2 昭31・9)、

藤野立然「親鸞聖人の撰述に見る漢字漢語に就いて」(龍谷大学論集365・366 昭35・12)、

秋葉安太郎ほか三名「真蹟親鸞聖人三帖和讃国宝本の研究――浄土和讃について――」(語文20 昭40・3)、

金子彰「親鸞の仮名づかい」(国文学攷76 昭53・1)等を参考とした。

〈付記〉

本稿は、平成五年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会における発表をもとにしてまとめたものである。席上、小林芳規先生、沼本克明先生、金子彰先生に貴重な御意見を賜りました。記して深謝申し上げます。